

Title	黄仁宇著, 山本英史訳 『中国マクロヒストリー』
Sub Title	
Author	岸本, 美緒(Kishimoto, Mio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1996
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.65, No.3 (1996. 1) ,p.141(301)- 153(313)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19960100-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

黄仁宇著 山本英史訳 『中国 マクロヒストリー』

岸本美緒

本書は、黄河文明以来の中国の歴史を通観しながら、「中国の近代化」の問題を考えようとするものである。中国において「近代化」（ヨーロッパをモデルとするそれ）が遅れたことは、誰でもが認める事実である。多種多様な諸要因——苛烈な自然、人口過剰、官吏の腐敗、合理精神の欠如、地主の収奪、帝国主義等々——がからみあいつつ、この事実を形づくってきた。それらの要因のうち、何が重要だったのか。既に起こってしまった歴史の過程について、個々の原因を切り離して再度実験してみることは不可能である以上、歴史家が何を主な原因として論じようとも、それを反証することは難しい。「中国の近代化はなぜ遅れたのか」という問いに対する「正しい」答えは、果して可能なのであろうか。そうした困難にもかかわらず、多くの研究者が勇敢に

も「中国の近代化の遅れの原因」を論じてきた。本書は、その最新の試みの一つとすることができよう。そのなかで本書の特色の一つは、作者も強調するように、「現代」すなわち一九八〇年代以降の改革開放の時代を、中国史のマクロな流れの中に位置づけようとする明確な姿勢にある。作者によれば、現在「国家は時代遅れの王朝官僚支配的な管理から商業原理による管理形態（中略）に移りつつある。その全領域が数量管理 [being mathematically managed]——以下角括弧内は原語を示す」の方向に向いている」（「はじめに」一二頁）。このことは、歴史的に見ていかなる意味をもつ事態なのか。資本主義か共産主義かという「イデオロギー論争」は、この事態の理解には役立たない。「過去の伝統と現在の計画を正しく関係づける中国の歴史を語る」ことによってこそ、

我々はこの事態を理解し得る。そして、「いかなるドグマ (doctrinal line) にも煩わされない私たちのような海外在住の歴史家」は、この仕事に取り組む責任を負っているのである、と。

このように、本書は、歴史事実を追うのみの単なる中国史概説ではなく、一定の視点をもって中国の歴史をとらえようとする。しかし一方、たとえば「東洋的専制主義」の如き概念が先行し、それを史実で肉付けしていく、といった種類の書物でもない。ほぼ王朝順に並べられた目次からも察せられる如く、本書は、歴代王朝の盛衰を時間軸にそって忠実に追いながら、そこに作者のコメントを付していく、といった形で構成されている。「マクロヒストリー」とは、歴史哲学ではなく、まず「ヒストリー」なのである。しかしその目的が、個別事実の確定や各時代の性格の解明にあるのではなく、黄河文明の時代から一九八〇年代に至る大きな流れを鳥瞰するなかで現代の意味を明らかにしようとしているところに、「マクロ」たる所以がある。

さて、以下本書の概要を簡単に紹介していこう。といっても、本書に述べられた各王朝に関する史実そのものは、特に新しい知見を提供するようなものではないた

め、目次に即して粗筋を追っていくことには、あまり意味がないであろう。概念先行型の書物と本書とを区別しようとする作者の意図には或いは反するかもしれないが、ここでは作者の用いるキーワードを中心として、本書の内容をまとめてみたい。

本書の最大のキーワードは、「数量管理可能 [mathematically manageable]」ないし「商業原理 [commercial principles]」、「貨幣換算管理システム [system of monetary management]」といった語であり、これらが作者の「近代」概念の核心をなす。「近代化とは本質的には商業システムの原理を国政に適用する過程であり、その結果、公共部門における広範囲の分業システムが民間部門におけるそれと並行し、それによって生じる一層高水準の機能が国家にたいしその特性いかにかわらずよりよい処理能力を与えるのである」(二七八頁)。「近代国家とは、その社会が金銭を媒介として成り立つ国家をいう。分業とサーヴィス・財の互換性とは、そこから生まれる権利と義務とともに、法律で定められるものである。(中略) この方向に進む過程を封建制から資本主義への発展と呼ぶのは歴史編纂のうえで極めて不幸なことであると思う。階級闘争という分析方法が必

然的に伴う意味合いは他のあらゆる側面を曖昧にしてしまふ。道徳に含まれた意味が洋の東西を問わず、その応用に関する専門的分析を台無しにしてしまふからである」(二四九頁)。「種々の方法によってそれらの国(近代のオランダやイギリス——引用者)はみずからを貨幣換算管理システムに適合する数量管理可能なものにしたのである。(現代の——引用者)中国もまた例外ではない。この突破点において、中国の歴史は近代西洋の歴史と連結されたといえよう」(二三三四頁)。

ここで言われる「商業原理」とは、超歴史的に存在する「商業」という営みの論理をさすというよりは、むしろ「商業」によって相互に結びつけられた社会全体の編成の特有なあり方を指している。即ち、「農業社会」が画一的な生産を行う均質な農民によって成り立つ社会であるのに対し、「商業社会」とは、多様な生産を行う不均質な人々によって成り立つ社会である。商業・交換が人々を一つのシステムへと結びつける。個々の要素が異質であればこそ、それらは発達した分業関係によって深く必然的に結びついた有機的なシステムを形成する。多様な利害と考え方もつ人々を統合するのは、人々に画一的な行動を強制する道徳ではなく、公平さと予測可能

性とを以て人々の活発な活動を支え、秩序立てる形式合理的な「法」「制度」である。「数量管理可能」とは、こうした制度が確立され、人々の行動規範として内面化され、その結果国家が、有機的に結合された社会の司令塔として効率的に人々の諸活動を把握しコントロールできるようになった状態をいうのだと考えられる。

「国家の特性いかんにかかわらず」と前掲の引用にあるように、「資本主義か共産主義か」という区別は、作者にとつては二次的な問題である。「貨幣換算管理システムが拡大して工業・商業部門と同様に農業部門をも含む全国の国民経済の各部門をその影響下に包括するに至ることが資本主義である。(中略)社会主義はその競争システムをより強力な大衆参加と制御によって修正する。(中略)両者の差異は相対的に過ぎない」(三〇三頁)と作者は述べる。「世界のすべての国家には、その結果を資本主義と呼ぼうが社会主義と呼ぼうが必然的に農業から離れて商業的実践に適合する一貫した傾向」(三一五頁)がある。作者の注目するのは、道徳的価値判断を超えた、このニュートラルな過程なのである。階級対立を基軸とした、封建制と資本主義、資本主義と社会主義、といった対比の枠組は、問題の本質を覆いかくすものと

して批判される。

こうした作者の「近代」像と対比する形で、伝統中国の社会のあり方は、「サブマリンスドイッチ」という比喩で形象化されている。「上には官僚と呼ばれる巨大なパンがあり、下には農民というこれまた巨大なパンがあり、ともに画一的〔undifferentiated〕であつた。あいだに挟まれた具は、文化規範・施設の精髓・科擧の要点〔cultural norms or the quintessence of governance or the substance of the civil service examinations——後二者は、政府の統治や科擧制度の根底にある精神ともいうべきものである〕」などで基本的には何百万もの小自作農からなる国の農業的単純さに適合する道德綱領なのである」(二四九頁)。ここで強調されているのは、伝統中国社会における有機的結合の欠如である。官僚によって構成される上層のパンも、小農民によって構成される下層のパンも、その内部に機能的分化と有機的結合関係を欠いた「画一的」なものである。そしてさらに、上層のパン(国家)と下層のパン(社会)は分離しており、その両者は「道德綱領」によってかろうじて見せかけの結合をなしているに過ぎないのである。

さて、こうした観点から、作者は中国の歴史の流れを

どのように論評するであろうか。幾つかの例を引きつつ、作者の論じ方を見てみよう。

まず、中国史の一大特色をなす巨大な統一帝国の形成、これを作者はどのようにとらえているであろうか。作者は、統一帝国形成における地理的条件の決定的重要性を強調する。第一に、広大な黄河平原において文化的同質性が早期から形成されたこと。第二に、強力な権力による黄河治水の必要性。第三に、遊牧民の攻撃からの防衛の必要性。これらの要因により、中国では早熟的に統一国家が形成された。「その国家制度は表面上では最新式にみえても基層構造は、とりわけ近代の標準からみれば粗雑で未発達だった」(四〇頁)。こうした状況のもとで農民大衆のなかに基層組織を構成するには、血族の団結を促進するより他に方法はなかった。そこに儒教が統一国家を支えるイデオロギーとなった理由がある。個人としての人間という考えは、それが楊子の如く私利に向かおうと、墨子の如く無条件の利他主義に進もうと、古代中国においては実際的ではなかった(三三三頁)。

作者は中国史における地理的条件の影響を強調するが、中国社会に固定不動の型を見ようとするわけではない。それぞれの王朝には個性的な特徴があり、新しい方向へ

向かう動きがある。例えば四世紀、分裂時代の華北には、豪族に率いられる地方的自衛集団が多数形成されたが、「もしこの傾向が続いていたら、封建制の新しい形態が中国で根づいたかも知れない。少なくともその後の中国の歴史は中世日本の歴史と並行して進むことになったであろう」（八九頁）。作者によれば、「中国の悲劇は地方組織や技術力が未成熟な状態のまま大帝国の統一が実現されてしまったことにある」（二二八頁）だったのであり、封建制は中国社会の成熟にプラスに作用した筈である。しかし、こうした自治組織は、分裂期の諸国家によってその自治権を奪われてしまった。

初期の唐王朝は、当時の水準からみればその国内組織を完璧に近い状態にまで整備した。唐の中央政府の一大特色は、中書・尚書・門下三省による分治であり、それは抑制と均衡〔checks and balances〕の一形態という印象を与える。整然とした法体系も、法による統治を思わせるものである。しかし、それは、我々のなじんでいる西洋の抑制と均衡とは異なる。「唐には選挙民の異なる利益を代表するような構成要素がなかったため、独立した司法機関がそのような基盤から生まれることはあり得なかった。（中略）その政府は所詮専制〔absolutism〕

の一形態にすぎなかった。（中略）（唐の制度は）制度以上に人間的〔more personal than institutional〕なものであり、基本的には皇帝の意思を代表するものであった」（二二二―二二三頁）

宋代の王安石の新法は、「経済管理によって国事を処理することを制度化する最初の試み」であった。しかし、現代的貨幣換算管理システムの要件である普遍的交換性〔universal interchangeability〕が、当時はいまだ成立していなかった。「古い制度とそれに関する既得権が破壊されて初めてサーヴィスと財の普遍的な交換性が確立できたのである。王安石の改革はそのような規模の衝突を引き起こさなかった。宋代の構造が対決を求めるところにはその社会的構成要素〔social components〕を發展させていなかったからである。それは経済的な運動というよりも政治的な衝撃であった。だから抗争は宮廷と文人官僚のなかに限られた」（二五五―二五六頁）。

明の太祖朱元璋のつくりあげた統治体制は、権力集中において際立っている。「このような巨大な国にかくも徹底した支配が中央政府によって行使された例を世界史において他にみることがない」。「その組織は構造的に単純であったため集権化が可能であった。何百万平方マイ

ルの領土を有する国が緻密で均質な統一体へと変化したとき、ある種の行政管理が通常では国民経済の下において機能する複雑な労働部門と財貨・サーヴィスの互換性にたいして代替機能を果たした」。しかし、「明は自身のサーヴィス施設の発展に興味をもたず、一国の経済を多様化させることにも全く冷淡であった。経済の多様化を促す法体系を生み出すことには一層無関心であった」(一九六―二〇〇頁)。その結果、明は、世襲的軍戸制度の衰退と税制の非柔軟性という二つの根本的原因によって数量管理不可能になり、瓦解した(二一九頁)。

以上のように、各王朝それぞれにおいて、個性ある展開が見られたにもかかわらず、結局「突破[Breakthrough]」は実現し得なかった。一八〇〇年頃の中国には、雇用労働を使用する大規模な工業や全国に多数の支店をもつ為替業者などの事例が見られるにもかかわらず、それらは例外的であり、新たな社会構成を生み出さなかった。「問題はどれだけの富が手元にあるかということではなく、いかにしてこの富が転移され再投資されて増殖を続けられるかということである」。信用の広がり、所有権の確立、分業とサーヴィス・財の互換性が自明かつ自然なものになっていること——こうした

社会的条件なしには突破は不可能だ。一八〇〇年の中国にはその条件が存在していなかった(二五四頁)。

それでは作者は、中国において「突破」はいつ、どのように行われたとするのであろうか。通説と同様、作者は中国史の大きな転機をアヘン戦争に求める。アヘン戦争後「一五〇年の中国の歴史は生き残りを賭けた国家をあげての長い闘争であった」(二六三頁)。作者によれば、「突破」の過程は三段階に分かれる。第一は、五四運動から国民政府にいたる過程である。知識人や官僚を中心とした上からの覚醒・統合の努力によって、サブマリンスァンドイッチの上のパンが、革命にむけて動きだした。第二は、共産党の指導する農村革命の過程である。それは農民大衆を覚醒させ、下のパンを革命にむけて統合した。しかし、上のパンと下のパンとがそれぞれ別々に統合されているのみでは、中国の近代的統合は達成されたとはいえない。「前者の啓蒙も後者の解放も中国の近代に向けての闘争を終了させない。究極のゴールは国家と社会とが現代の基準で数量管理可能になることであり、またその機構の稼働性をよくし、構造を補強することにある」(二二六頁)。そして、現在の改革開放政策の課題はまさに、多様化と高水準の交換と適切な労働分配を通

じて、上のパンと下のパンとを統合し、中国のサブマリ
ン・サンドイツ構造を永遠に過去のものとすることに
あるのである（三二五頁）。

歴史の展開を物語りつつ付せられる作者のコメントを
やや強引にまとめてみると、以上のようになるうか。事
実を羅列した概説でもなく具体的イメージに欠ける抽象
的史論でもなく、中国史の様々なエピソード、各時代の
個人的な特色に即して自らの中国史観を提示しようとする
作者の意図は成功しているように見える。読者は、固
有の手応えをもつ歴史の細部に触れると同時に、作者の
生き生きとした全体的歴史感覚と、現代中国に対する熱い
メッセージを受け取ることができよう。随所に付
せられた作者自身の手になるイラストも、作者の多才ぶ
りを示すものである。

古代から現代に至る広い時代的範囲をカバーする本書
を論評することは容易ではないが、以下若干の感想を述
べてみたい。

まず、本書の要をなす「数量管理可能」という語につ
いて見よう。「近代」という言葉の定義は論者によつて
様々であるうが、作者は「数量管理可能」性を近代概念
の核心に据えている。「資本主義」或いは「個人の自立」

「市民社会」といった語を中心に「近代」を考えてきた
日本の戦後歴史学の立場からすれば、「数量管理可能」
という語はいささか異様に見えるかもしれない。この語
のもつ一見ニュートラルな語感のなかに、構造機能主
義の影響を深く受けていた六〇年代の「近代化論」（と
それに対する日本の歴史学界の激しい批判）を想起する
読者もあろう。かつて冷戦の真つ只中で「近代化論」が
もった政治的な意味と、「冷戦後」の今日において黄氏
が本書にこめたメッセージとは、無論大きくことなる。

しかし、構造や機能の分化とそれに伴う有機的システム
統合の発展を中心にすえる歴史観、現代欧米社会をその
到達点と自明にみなす態度、矛盾闘争による構造転換
ではなくシステムの統合度の増大を重視する発展の連続
的イメージ、日本と欧米とを近代化の成功した社会と見
てそれと中国とを対比する構図、など、本書の議論が六
〇年代の「近代化論」と大きく重なっていることも確か
だと思われる。

私はここで、本書の議論が「近代化論」と同じだから
だめだ、などと言おうとするのでは勿論ない。むしろ、
かつての「近代化論」批判を支えた論理的・価値的前提
が自明のものではなくなり、歴史学界の潮流も大きく変

化した現在、単なる政策批判・イデオロギー批判ではなく、「近代化論」のもつ研究史上の意味を改めて考えてみる必要があるのではないだろうか。システムの結合の深化において社会の発展をとらえようとする本書の基本的観点は、作者のみの特異な観点ではない。それは、「社会」の存在を自明の前提としてその性格——封建制か資本制か、また社会主義か——を論ずる歴史学の流れとは別に、「そもそも社会とは何なのか」を真摯に問おうとした今世紀社会学の大きな潮流にさおさしているともいえる。

それは確かに、社会の発展について、資本主義か共産主義かといった対立を超えた、より根源的な視角を提示するものかもしれない。しかし問題は、システムの統合の深化ということが、それ自体、矛盾なく調和した過程であり得るのか、ということである。例えば、人々の活発な活動を通じて社会を多様に分化させる鍵として作者もしばしば言及する「市民的自由」と、システムの結合強化の表現としての「国家の管理能力」——これらは、それぞれをつきつめていったときに、果して何の問題もなく調和するものであろうか。「個人」と「社会」のダイレンマは、社会科学の成立以来、この学問に独特の

緊張をもたらしてきたし、特に七〇年代以降、楽観的な調和論への懐疑とともに「近代化論」そのものが退潮しつつあるのではないか。社会学者たちが取り組んできたこの難題を閉却し、調和的結論のみを輸入するとき、問題のエッセンスはかえって手からこぼれ落ちてしまうのではないだろうか。

「市民的自由」と「数量管理可能性」とを楽々と結びつける作者の議論は、私に、B・シュウオーツ氏の厳復論を思い起こさせる。清末における西洋自由主義思想の紹介者であった厳復にとつて、自由主義とは——彼自身明らかに意識することはなかったにせよ——それ自体が目的なのではなく、国家の富強という目的に対する手段であった。「彼の凝視の焦点が、究極的には個人それ自体ではなく、個人主義が生み出すと想定されるものの上にあつたために、個人対社会、個人的イニシアティブ対社会的組織などなどの鋭い対立命題は、厳復の認識の核心には浸透しないのであつた」(『中国の近代化と知識人』東京大学出版会、一九七八年、二三六頁)。黄仁宇氏の場合は、その強調点は初めから、「自由主義」よりも「数量管理可能性」の方に傾いているのだが、「個人対社会」のダイレンマに対する無関心という点では、黄

氏と敵復とは親近関係にあるといえるかもしれない。それは、「現代中国に対する鋭い関心」を以て西洋をみる中国知識人の、一つの「伝統」でもあろうか。

特に近現代を扱う際、「統合」「管理」への作者の鋭い関心は、本書の本来の眼目である「多様化・分化」の論点をも置き去りにして進んでいくように見える。五四運動（五四愛国運動）や共産党による革命は、少なくとも上のパン、下のパンそれぞれの内部において、近代的な質の統合をもたらした、と作者は言う。しかし、その「統合」の原理とは、内部の多様化・分化に必然的にともなう有機的な結合であったのか。むしろ、危機のなかで「同胞」相互の直接的共同性、「人民」の本来的同質性に訴えることによって強く結ばれた絆ではなかったのか。改革開放政策のもとで中国社会に広がっている不安感は、「多様化」が、従来の結合を強化するよりはむしろ緩めてしまう、そうした懸念に基づいているのではないだろうか。

さて、以上、作者の「近代」観、即ち中国史を測るモノサシについて感想を述べたが、そうしたモノサシをもって作者は中国史の具体的過程にアプローチし、中国の近代化の遅れの原因を論ずる。作者は、「(地理的環境

の影響は)あらゆる個人や王朝の行為を全部まとめたよりもさらに強力である」(二五二頁)と述べており、一見したところ、歴史を通じて基本的には変わらない地理的な要素を強調する地理的決定論者であるようにも見える。しかし、さきに引用したように、作者は同時に、世界のあらゆる国家には「必然的に農業から離れて商業的実践に適合する一貫した傾向」があるとも述べている。作者の立場は、世界諸地域に一律の発展段階を想定するものではないと同時に、中国社会の絶対的停滞を論ずるものでもない、柔軟な立場であるといえよう。

しかし、恐らくその柔軟性ゆえに、作者の説明には、論理的に曖昧な点が残るように思われる。例えば、王安石の新政法について作者は次のように述べる。「貨幣換算管理システムは多くの必要条件に左右され、その必要条件は宋代ではとても備わるものではなかった」。「帝国の財政機構を商業的な性格にするためには貨幣換算管理システムが適切に整う必要があったことがわかる。為替手形・船荷証券(中略)などに影響する法が法例全書に載り、執行が続けられなければならなかった。さらに重要なことは、相続・破産(中略)に有効な法的措置が金銭が幅をきかせる不安定な社会状況に適合するものでなけ

ればならなかったことである。宋代の国内貿易がこのような段階に達していたという証拠はない。「中国社会の基層構造には一層多くのものが不足していた。(中略) 細分化された土地所有(中略) 農民の逃亡(中略) 国民経済の農業部門内に資本蓄積ができなかったこと(中略) このような状況が支配していれば、経済のサーヴィス部門も出発の足場を得ることができなかつた。(中略) 裁判に金がかかることはもっぱら市民法の成長と発展を妨げた」(一五五―一五八頁)。こうした説明は、結局のところ循環論法に帰着していくのではないだろうか。制度改革が成功するためには社会経済的基礎が必要で、社会経済的基礎が整うためには法と制度が必要である。作者自身、中国の「停滞」の責任はどこにあるのかという問題については様々な意見が可能であり、結局は地理的条件が重要であつたと述べている(二五二頁)。

このことは、システム論を「歴史」として語るという作者の本書での野心的試みが、実は論理的に相当困難なことなのだ、ということを示唆しているようにも思われる。システムの外にあってシステムを破壊し再建してゆく生産力といった根本的動力を作者は想定しない。システムの発展はシステム自体の深化・展開として連続的に

イメージされる。とするならば、「突破」の力はどこからくるのか。結果として、本書の論調が、結果論的な地理的決定論に傾き、「商業化の必然的傾向」についての作者の言明にもかかわらず、薄められた停滞論の趣を帯びていることも故なしとしないのである。これは、本書の欠点というよりは、システム論的歴史学の直面せざるを得ない興味深い方法的難題であると思われる。「マクロヒストリー」というような大きな議論が、個別実証的な論文に比べて方法的に脆弱であることは宿命でもある。その脆弱さの自覚・内省を通じ、「歴史を把握する」とはどういうことを絶えず問うていくことにこそ、大理論の積極的意味があるように私は感じている。

しかし、むしろ本書を読んで印象づけられることは、過去の歴史を客観的に認識し得るといふ、作者の満々たる自信である。それは、「数量管理可能」性を核心とする「近代」の進歩性への確信と表裏をなすものである。「マクロヒストリーの観点からするとそれは明白である」(三〇八頁)——こうした断言は、本書の随所に見られる。「ただ我々だけが二〇世紀末の後知恵 [hindsight] から恩恵をうけているのである」と。

作者は、階級闘争史観に見られるような過去に対する

道徳的判断の不毛性を一貫して指摘している。作者は過去の支配階級に対し、怒りにみちた非難をなげつけたりは決してしない。しかしそれは、作者が価値相対主義者であるということの意味するわけでは勿論ない。むしろ、現代の高みにたつ自らの圧倒的な優位性と正しさを確信すればこそ、作者は穏やかな筆致で彼らの限界を指摘し得るのである。「一世紀以上にわたって、中国の研究者は西洋の研究者と同様に道光帝と側近たちにたいして、その傲慢さ、独りよがり、無責任と腐敗ぶりを十二分に非難してきた。これらの非難から身の証を立てられる者は誰もいないが、現在から振り返ってみれば、他の誰がその地位にあつたとしても、のしかかる制度的負担や文化的遺産の重圧の下では彼らよりもつとうまくやれることはあり得なかつたであろう。(中略) 習慣が彼(林則徐——引用者)の上奏と布告において道徳意識が現実を優先するよう命じた。だが林則徐は決して不誠実な人物ではなかつた。自分を欺くこと [self-deception] が、中国人一般の心理の属性であつたといえれば十分である」(二六一—二六二頁)。「(洋務運動について——引用者)多くの業務契約は結局のところ杜撰なものでしかなく、事務経理は厳しく監査されなかつた。(中略)

人事管理は一般基準を欠いていた。中国の経済生活全体にそのような基準がなかつたからである。これらをすべて『腐敗』と呼ぶことは状況を誤って理解する危険性を孕むことになる。このような道徳的批判が行われることは、その制度が機能していることをほのめかすものであろう。実際はそうでなかつた」(二七三頁)。過去の人々にたいする読者の性急な非難を戒めつつ、作者は、過去の人々の置かれていた状況や考え方が、今日の我々のそれと異なるものであつたことを強調する。その異質性の強調は、過去の人々のもつ固有の倫理的体系を理解しようとする関心に基づくものではない。むしろ、自らのよつて立つ高みと彼らの置かれていた立場との隔絶性、彼らを捉えていた歴史的限界に配慮すべきだ、という認識が、こうした作者の態度を支えているのである。

作者は、資本主義か共産主義かといった近視眼的な政策的対立を超え、マクロな視野で中国史をみたとき、中国史の全体的意味が明らかになり、「長い目で見た歴史の合理性」を把握し得るとする。しかし、そうした超越的な視点にもかかわらず、本書の議論が、まさに現在の改革開放路線の政治的要請に一致するものであることも明らかである。資本主義か共産主義か、市民的自由か大

衆路線か、といった対立が原理的敵対的な対立ではないということ、それらは安定団結のもと中国社会を有機的に統合し「数量管理可能」な国家を作り上げるという大目的に対比すれば副次的で解決可能な矛盾であること、そして現政権の推進する改革開放政策は必然的な歴史発展の帰結としてのその大目的を追求するものであること——こうした合意を作り上げることこそが、現在の改革開放路線にとって緊要の課題であり、路線闘争に煩わされない客観的な立場から「長い目でみた歴史の合理性」を論じようとする本書は、政策論争からの超越を標榜するその姿勢ゆえにまさにそうした実践的課題に応えているといえよう。

以上総じていえば、本書の議論は、次のような特色をもっているといえる。「数量管理可能性」を核心とする「近代化」が、現実としても当為としてもあるべき方向性であるという確信。中国の伝統社会は、ヨーロッパや日本と異なり、そうした方向性が順調に発展しなかった社会であるという認識。そして現在に至り、中国は急速にそうした「近代化」を実現しつつあるのだ、という主張。作者の見解は明快であり、西洋型近代化の価値を深く信じつつ、イデオロギー的対立を超えた中国の近代化

を願う人々の心情に強く訴えるものがあるであろうことは、十分予想できる。それは、諸々の困難にもかかわらず、現在の開放政策が正しい路線であり、かつ成功し得るのだ、とする点で、開放政策推進者への力強いエールとなっている。

しかし、「マクロ」な視野に立って中国史を鳥瞰する作者の、自らの方法的立脚点に対する自信を感ずれば感ずるほど、私は本書に対する違和感を抑えることができなかったことも、告白せねばなるまい。作者は、「二〇世紀末の後知恵」(この言い方に戲言的ニュアンスがあるのかどうか、私には判断がつかないのだが)に支えられた自らの視点の正しさに、保留なき信頼をおいているように見える。しかし、思えば過去の中国知識人たちも、それぞれ時代の「後知恵」に恩恵を受けながら、彼らが客観的な真実であると信じる全体的歴史像をうちだし、それに支えられながら現実を変革せんとして試行錯誤してきたといえよう。一方で、欧米の「数量管理可能」社会の形成も、秩序問題の深いディレンマにつきあたりながらの試行錯誤の過程であった。我々もまた、そうした試行錯誤の過程のなかにいるのだ、という自覚こそ、歴史の教訓なのではあるまいか。作者は一貫して、史的唯

物論の階級闘争史観の不毛性を批判するが、歴史の外に超越した自らの特権的視点への確信という点では、両者は相似たものがある。百年後、二百年後の「後知恵」は、二〇世紀末の中国を、そして黄氏の自信に満ちた議論をどう見るであろうか。我々は誰もそれを知ることにはできないけれども、興味を持たずにはおられない。

最後になったが、作者黄仁宇氏は湖南省生まれの中国系アメリカ人で、専門は明代の制度史である。明の税制に関する実証的な大著があるほか、明末を題材とした中国社会論『万曆十五年』が既に邦訳されている。本書『中国 マクロヒストリー』には、原注のほか、翻訳者による六〇頁にわたる訳注がつけられ、また、関連年表が附載されている。

(東方書店、一九九四年、四四六頁、四八〇〇円)